

産地、今(21)

リ レ 一 隨 筆

神奈川県の三浦ダイコンの産地

(神奈川県環境農政部農業振興課農業専門技術担当
小林正伸)



ダイコン栽培風景（三浦市菊名）

The Introduction of Japanese Radish Producing District in Kanagawa. By Masanobu KOBAYASHI

(キーワード：神奈川県、産地だより、三浦半島、三浦ダイコン、‘青首系品種’)

I 産地の概要

三浦半島は神奈川県の東南に位置し、南北40 km、東西は広いところで13 kmの細長い半島で、東は東京湾、西は相模湾に面し、周囲を海に囲まれているため冬は暖かく、夏は涼しい気候となっている。

戦前の横須賀市の軍港としての発展や、戦後の京浜急行の三崎口駅までの延長により急速に都市化が進み、半島の北部では農地が激減したが、横須賀市の南部から三浦市にかけては現在も神奈川県最大の露地野菜生産地帯として維持され、県内をはじめ、京浜首都圏への生鮮野菜の供給基地として重要な役割を果たしている。

三浦半島では夏はスイカ、カボチャ、メロン、冬はキャベツ、ダイコンの栽培がほとんどで、少品目多量栽培を行っている。中でもダイコンは「三浦ダイコン」として100年以上の歴史を持ち、現在でも冬場の京浜市場の50%以上を占める重要な産地を維持している。

II 産地としての歴史

天保12（1841）年に刊行された相模風土記に「郡中多く播植す。俗に鼠大根と言、其形蕪菁に似て根の様鼠尾に似たり。高円坊村より出るを殊に上品とす。」と記録されている。当時の栽培面積の記録は残っていないが、大正年間には約200 ha、昭和40年代には600 ha前後が作付けられ、平成15年度産では約800 haと栽培面積は年々増加している。最近では、環境保全型農業を早くから意識し、1995（平成7）年には特産・三浦生産販売連合が環境保全型農業推進コンクールで農林水産大臣賞を受賞するなど全国に先駆けた取り組みを行っている。

品種面では明治以降在来の‘高円坊大根’‘小原大根’をもとに改良を進め、「三浦系品種」を作り上げてきた。昭和50年代に入ると消費者の嗜好が、甘味があり小型で核家族向きの‘青首系品種’に人気が集中し、三浦半島で栽培するダイコンも急速に青首系品種群に変化した（表-1）。現在の栽培品種は、12月から3月までの栽培期間、北部・南部との差などをすべてフォローできる品種ではなく、種苗会社から発表される数多くの

表-1 「三浦ダイコン」の品種の変遷（単位：千ケース）

年	三浦系品種	青首系品種		
		耐病総太	青さかり	その他
昭和53年	3,392	—		
54年	2,541	743		
55年	2,717	858		
56年	1,671	2,048		
57年	555	2,968	270	
58年	105	3,299	635	
59年	92	3,856	837	
60年	50	4,464	777	
61年	46	4,818	859	
62年	70	4,544	130	668
63年	57	3,293	918	277
平成元年	65	1,988	2,091	206
2年	48	1,104	2,828	233
3年	39	1,282	2,075	1,103
4年	49	852	1,744	1,818
5年	52			4,573
6年	44			4,710
7年	26			4,589
8年	33			4,448

注) 1. 三浦市農協の新聞に掲載された各年の品種別の予約数量。
2. 平成5年以降は‘青首系品種’の品種区分なし。

品種の適応性を試験し、栽培時期・地域にあった品種を選定し栽培している。従来の‘三浦系品種’はほとんど姿を消し、作付面積の 1 % にも満たない。

販売面では、明治の中ごろまでは自家用あるいは近隣での販売が主であったが、明治 40 年ごろから船で東京へ向け出荷が始まった。大正時代には横須賀に運送会社ができ、トラックでの東京出荷が主となり、三浦郡の町村部落には共同出荷組合が設立された。1926(大正 15) 年には三浦郡蔬菜出荷組合連合会が設立され、東京の市場に売り込みを図り、苦労の末、昭和 10 年ごろには「冬ダイコンは三浦」との市場の評価を得ることができた。現在も特産・三浦野菜生産販売連合が京浜市場を中心に共販出荷を行っている。「三浦ダイコン」は名実ともに関東市場で冬ダイコンの王者としての地位を保ちつづけているが、気候、立地条件もさることながら生産者、関係機関が一体となって产地維持のために努力した結果といえる。

III 病害虫の発生と対策

野菜产地は流動するといわれるが、「三浦ダイコン」は 100 年以上の歴史を継続している。三浦半島のダイコンは作型が病害虫が発生しにくいことも幸いしているが、過去には病害虫の発生による危機にも見舞われた。しかしその都度農家の努力と、関係機関の協力で危機を乗り越えてきた。

1 アブラムシとガリダイコン

1952(昭和 27) 年より根部の生育不良、奇形、変形、ねじれ、表皮の亀裂褐変などの症状が多発した。1956(昭和 31) 年に特殊病害対策協議会を発足させ、原因究明と対策の検討を行った。その結果、発生原因是アブラムシが媒介するウイルス病で、それまでは陸稲の間にダイコンが播種されていたものが、陸稲の作付の減少に伴いダイコン単作となり、アブラムシの被害を受けたためと判明した。このため、アブラムシの薬剤防除の徹底を図ることにより、当面の被害を回避することが可能となった。一方ではウイルス病に強い‘三浦系品種’の育種を開始し、抵抗性の‘都系品種’のダイコンとの交雑により耐病性の‘三浦系品種’が育成され、被害の発生はなくなった。

2 萎黄病

1968(昭和 43) 年に三浦半島で初めてダイコン萎黄病が発見された。この病気は多くの产地で壊滅的な打撃を与えていたことから、2 年間にわたり関係機関の職員が総出で発病圃場の確認と被害株の抜き取りを行った。発病畠の防除対策はクロールピクリンで行うことを徹底した結果、昭和 40 年代の後半にはほとんど発生が認められなくなった。三浦半島でのダイコン

萎黄病撲滅の事例は極めて珍しかったため、農林水産省農事試験場が研究を開始し、三浦半島の土壤がダイコン萎黄病の発病抑制型土壤であることを明らかにした。長年の土づくり、土壤診断等による適正管理が土壤の基本的性質の力を發揮させ、また、栽培時期が秋から冬にかけてで、病原菌密度が高まりにくくことにより、萎黄病の発生を抑えていると考えられている。

3 ゴマダイコン

ゴマダイコンの最初の記載は 1959(昭和 34) 年であるが、発生は昭和 20 年代末からと考えられる。クロールピクリンが有効であったため大きな被害とはなっていなかったが、昭和 40 年代の後半からクロールピクリンが使用できない地域が増え、産地としてこれを使用しないことを申し合わせた結果、被害が顕在化してきた。1975(昭和 50) 年に全農家を対象にアンケート調査を実施したところ全域に発生が認められ、25 ha で発生が報告された。事態の重大さからプロジェクトチームを発足させ、病原菌の同定、発生生態、防除対策など幅広い研究を行った。この結果 *Pseudomonas marginalis* pv. *marginalis* による黒点輪腐病で、防除対策としてはクロールピクリン剤のほか、D-D・メチルイソチオシアネート剤、ダゾメット剤などが有効であることを明らかにした。その後被害は急速に減少し、‘青首系品種’が栽培されるようになってからはほとんど認められなくなった。

4 キタネグサレセンチュウ

被害が認められるようになったのは昭和 20 年代後半から 30 年代初期で、ごく一部の地域で発生し、被害面積もごくわずかであった。昭和 40 年代に入り被害が拡大し、現在では最も重要な害虫となっている。防除対策としては殺線虫剤の効果試験が行われ、D-D が有効なことを明らかにし、現在でも防除対策の柱となっているが、最近では粒剤の施用も増加している。1968(昭和 43) 年より三浦試験場でマリーゴールドによる防除の研究を開始し、1974(昭和 49) 年より現地に普及した。当初はスイカとの混作で普及が図られたが、肥料の競合やスイカの作期の前進から空き畠の単作に切り替えられ、1991(平成 3) 年には 90 ha で栽培された。直播では雑草問題、定植では労力の問題、栽培後のネキリムシの発生などから最近ではエンバクに切り替わってきている。

5 その他の病害虫

最近問題となっている病害虫は、タネバエの被害が 9 月下旬～11 月ごろまで発生する(図-1)。対策としては未熟有機物を施用しないことや、イソキサチオン粒剤の播種時施用が行われている。平成 7 年ごろよりハイマダラノマイガの発生が目立つようになり、防除

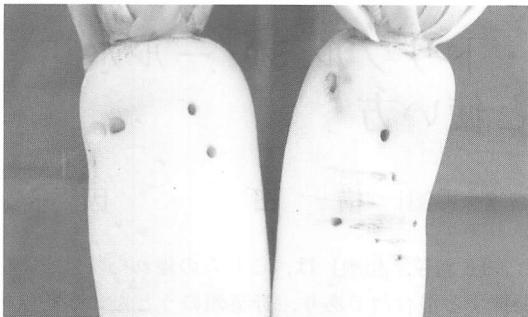


図-1 タネバエの被害

体系の中に組み込まれつつあるが、2003（平成15）年は発生が少なかった。ナモグリハエは年々密度が上昇し、2001（平成13）年に大発生した。昨年は発生が少なかったが、今年は既に多発しており、今後大発生する可能性が高い。現在、研究に取り組む準備をしている。ネキリムシ、ヨトウムシ類も恒常に発生するが有効な薬剤があり、特に問題とはなっていない。コナガは三浦半島では密度が上がる5月中旬にはアブラナ科野菜がなくなるため、密度はあまり高くならず、問題とはならなかった。最近キャベツの栽培期間が延長され、6月まで栽培されるため、今後の動向には注意が必要である。

病害では傷や肥料切れから黒班細菌病が発生するため、銅剤の予防散布を行うとともに、肥料切れを起こさないような管理を心がけている。品種が‘青首系品

種’に変わってUFOとも呼ばれるわっか症が多発した。当初原因不明であったが、農業総合研究所により白さび病菌による病害であることが明らかにされ、TPN水和剤の登録が取れたことにより防除が可能となった。根部の障害では、播種後雨が多く土壤水分の多い年には横縞症が、雨が少なく乾燥する年には横帶症が発生する。両妨害とも病原菌が特定されておらず、防除対策も確立されていない。その他円形褐斑病、根部先端表面に小黒点が発生する砂かけ症状が年により発生する。

IV 今後の問題点

昨年はややよかつたが、ここ数年のダイコン価格の低迷は、産地維持の障害になりつつある。また、食生活の変化はダイコンの需要減少への不安ともなっている。病害虫の面では、安全安心に対する関心の高まりの中、農薬への風当たりは強い。「三浦ダイコン」の作期は病害虫が発生しにくい時期であり、農薬の使用回数は現状でもかなり少ないが、今後さらなる削減に向けての努力が要請されている。この先、突發的な病害虫の発生など、誰にも予想できない状況も心配される。このように「三浦ダイコン」を取り巻く状況は厳しいが、今まで多くの問題を乗り切ってきたように農家の努力と関係機関の結束により産地の維持を図る必要がある。

発行図書

生物農薬ガイドブック 2002

社団法人日本植物防疫協会 編 A5判 口絵カラー24頁 本文205頁
定価3,360円税込み（本体3,200円） 送料310円

生物農薬（BT剤を除く）についての概論と利用できる各剤の成分・特徴・適用内容・使用方法・使用上の注意点・使用例のデータについて詳しく解説。口絵では、剤ごとのパッケージ・内容物・対象病害虫雑草・処理場面などを掲載し、生物農薬の実用書として、技術指導書として最適です。

掲載生物農薬名：殺虫剤（ハモグリコマユバチ剤、イサエアヒメコバチ剤、オンシツコナジラミ剤、コレマンアブラバチ剤、ショクガタマバエ剤、ヤマトクサカゲロウ剤、タイリクヒメハナカメムシ剤、ククメリスカブリダニ剤、チリカブリダニ剤、スタイナーネマ・カーポカブサエ剤、スタイナーネマ・グラセライ剤、バーティシリウム・レカニ剤、ペキロマイセス フモソロセウス剤、ボーベリア・プロンニアティ剤）、殺線虫剤（パスツーリア ペネトランス剤、モナクロスポリウム・フィマトパガム剤）、殺菌剤（アグロバクテリウム・ラジオバクター剤、シュードモナス フルオレッセンス剤、シュードモナス CAB-02 剤、バチルス ズブチリス剤、非病原性エルビニア・カロトボーラ剤、対抗菌剤）、除草剤（ザントモナス キャンペストリス剤）の商品34銘柄。

お申し込みは直接当協会へ、前金（現金書留・郵便振替）で申し込むか、お近くの書店でお取り寄せ下さい。

社団法人 日本植物防疫協会 出版情報グループ 〒170-8484 東京都豊島区駒込1-43-11
郵便振替口座 00110-7-177867 TEL(03)3944-1561(代) FAX(03)3944-2103 メール：order@jppa.or.jp